

Coronary lipid-rich plaque characteristics in Japanese patients with acute coronary syndrome and stable angina: a near infrared spectroscopy and intravascular ultrasound study

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2021-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 徳仁 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002588

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2319 号

Coronary lipid-rich plaque characteristics in Japanese patients with acute coronary syndrome and stable angina: a near infrared spectroscopy and intravascular ultrasound study

本邦における近赤外線スペクトロスコピーと血管内超音波検査による急性冠症候群，安定型狭心症患者の冠動脈脂質コアプラークの特徴

高橋 徳仁（たかはし のりひと）

博士（医学）

論文審査結果の要旨

本論文は，近赤外線スペクトロスコピーと血管内超音波の複合モダリティである NIRS-IVUS (Near infrared spectroscopy intravascular ultrasound) を用いて，本邦における冠動脈不安定プラークの特徴を明らかにするとともにあらゆる 4mm 区間での最大の lipid core burden index (maxLCBI_{4mm}) 400 が急性冠症候群 (ACS: acute coronary syndrome) 責任病変を予測するあることを明らかにした臨床的に意義のある論文である。近年，冠動脈の不安定プラークは狭窄度によらずプラーク由来の ACS を引き起こす危険因子であることが報告されているが，冠動脈イベントが少ない本邦における不安定プラークの特徴，臨床的意義については明らかではなかった。筆者らは NIRS-IVUS を用いて 2017～2020 年に経皮的冠動脈形成術を行った 207 人の患者を対象とし，定量的な解析を行い，ACS の責任病変は安定型狭心症の責任病変と比べて有意にプラーク断面積が大きく，maxLCBI_{4mm} が高値であることを示した。また，多変量ロジスティック回帰分析において maxLCBI_{4mm} ≥ 400 は独立した ACS 責任病変の予測因子であることが示された（調整オッズ比 3.87; 95% 信頼区間, 1.95 - 8.02; p < 0.001）。NIRS-IVUS によるプラークの評価が安定型狭心症と急性冠症候群の原因病変を区別するのに役立つ可能性があり，maxLCBI_{4mm} ≥ 400 の閾値が臨床的に有用であることが確認された。高リスク脂質コアプラークのサロゲートマーカーは認められず，血管内の直接的なプラーク特性の評価は依然として重要であることが示唆された。

よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。